

新 現代の国語 目次

この教科書で身につく言葉の力（観点別言語能力一覧）

入門

世界を
言葉と声で表す

言葉と声で表そう

1 わかり合うために

〈読む〉

情報を読み解く

伝え合い（コミュニケーション）に大事なことを考える

「コラム」情報を読む―統計資料の読み方・扱い方―

情報を要約する

届く言葉、届かない言葉

「コラム」「要約」と「要旨」

鷺田清一

情報を関連づけて
まとめる

わかりあえないことから
聞く力

●表現テーマ例集 コミュニケーション

平田オリザ
阿川佐和子

單元ごとに、「話す・聞く」「書く」「読む」
いずれかの領域が設定されています。

2 確かな情報を
伝えるために

〈話す・聞く〉

情報を吟味する

情報はつくられる

「コラム」メディアとのつきあい方

情報と適切に
つきあう

ひとまず、信じない

「コラム」引用について

押井守

情報を適切に
編集する

情報を編集し、的確に発表する―パブリックスピーチ

●表現テーマ例集 メディア・リテラシー

吉岡洋

3 情報を生かすために

〈書く〉

情報を集めて選ぶ

人が死なない防災

「コラム」わかりやすく伝える

片田敏孝

情報を整理する

減災学をつくる

「コラム」情報の編集

矢守克也

情報を作りかえる

評価した情報をまとめる―報告書

「コラム」やさしい日本語

外山滋比古

●表現テーマ例集 共生・環境

情報の「メタ」化

学びを深める

74

ハザードマップや「やさしい日本語」など、国語の観点から**防災・減災**について考える単元です。

4 よりよい読み手になるために

〈読む〉

- 情報分析・評価する
- 説明の方法を理解する
- さまざまな視点から情報を捉える

読むことのレッスン

―コラム―分けることの長所と短所

水の東西

―コラム―問題・結論・理由

コインは円形か

―コラム―思う文章と考える文章

●表現テーマ例集 文化

飯間浩明

90

山崎正和

91

佐藤信夫

96

佐藤信夫

97

5 場に応じて伝えるために

〈話す・聞く〉

- 根拠を明確にして考えを伝える
- 表現の仕方に注意する
- 相手を意識して自分の考えを伝える

中身当てクイズ

―コラム―情報とコミュニケーション

読み比べる ―海ガメの無念

―コラム―論理と感情

構成や展開を意識して発表する―プレゼンテーション

●表現テーマ例集 科学技術

学びを深める マルジャーナの知恵

佐藤雅彦

108

岩井克人

111

岩井克人

115

岩井克人

120

6 説得力を高めるために

〈書く〉

- 引用の目的やはたらきを理解する
- 説明の仕方を考える
- 情報を活用する

折々のことば

―コラム―言葉を拾う

宝探してみたいに

―コラム―読書はつながりの中で

情報を整理して推薦する―ブックトーク原稿

―コラム―コミュニケーションとしての読書

●表現テーマ例集 読書

鷺田清一

128

芦田愛菜

130

川上未映子

137

川上未映子

143

川上未映子

144

川上未映子

146

学びを深める ぐうぜん、うたがう、読書のススメ

―コラム―対話と思考を起動させる

檻の中の「街」

―コラム―意思決定・合意形成のための会議

小さな哲学者

●表現テーマ例集 国際理解

安田菜津紀

152

中村安希

159

中村安希

166

中村安希

172

7 考えを共有していくために

〈話す・聞く〉

- ある事実をもとに未知の事柄を推し量る
- 情報を関係づけてまとめる
- 伝えることの意味や方法を理解する

読書家でもある女優・芦田愛菜さんの文章など、「読書」をテーマとする単元です。

8
よりよい書き手に
なるために

〈書く〉

事例と主張の
関係を整理する

ありのままの世界は見えない
ものとはことば

田中真知
鈴木孝夫

「コラム」レトリック

184

自分なりの考えを
まとめる

情報を活用して説得的に書く―小論文

192

「コラム」推敲

194

意図が十分に
伝わる書き方を
探る

書いた文章を批評し合う―推敲

195

意図が十分に
伝わる書き方を
探る

●表現テーマ例集 生き方

196

学びを深める
真実はひとつじゃない

森達也
198

まとめ

言葉を
豊かに

言葉で世界を豊かに

204

資料編では「話し合いの方法」や「思考の方法」、実用的な文章の特徴など、**随時参照できる情報**を掲載しています。

資料編

◎話し合いの方法

208

◎文章の方法

210

◎情報の収集と発信

214

◎「思考の方法」一覧

216

◎論理的な文章の特徴

220

◎実用的な文章の特徴

222

◆報道の文章

222

◆手紙

224

◆記録

226

◆実務的な文章

228

◆宣伝・広告の文章

232

◆言語活動のための用語集

234

◆高等学校で学習する
音訓のある常用漢字一覧

236

『新』シリーズ教科書では身につける「言葉の力」ごとに単元を組んでおり、「何のために学習を行うか」が明確です。

領域		単元
まとめ	入門	身につけた言葉の力 言語活動
世界を言葉で広げる力	世界を言葉と声で表す力	
●	●	
●	●	
🔔	🔔	
言葉で世界を豊かに	言葉と声で表そう	(学習) 素材
言葉でつながっていく私たち	言葉がつくる世界	単元の話題 (テーマ)

読む						領域
4			1			単元
さまざまな視点から情報を捉える力 論理の展開を分析して捉える活動	説明の方法を理解する力 内容や形式について批評する活動	情報を分析・評価する力 表現の仕方の特徴や課題などを明らかにする活動	情報を関連づけてまとめる力 異なる形式で書かれた複数の文章を読む活動	情報を要約する力 情報を取り出したり、情報と情報を関連づけて解釈したりして、考えを深める活動	情報を読み解く力 図表をもとに考え、理解したことや解釈したことを発表する活動	身につけた言葉の力 言語活動
	●		●	🔔	🔔	
		●	🔔	●	●	
●	🔔	🔔	●	●	●	
🔔	●	●				
●	●	●	●	●	●	
コインは円形か 佐藤信夫	水の東西 山崎正和	読むことのレッスン 飯間浩明	聞く力 阿川佐和子 平田オリザ	わかりあえないことから 阿川佐和子	届く言葉、届かない言葉 鷲田清一	(学習) 素材
	文化				コミュニケーション	単元の話題 (テーマ)

この教科書で学ぶために

教科書の構成

この教科書は、「入門」単元、話す／聞く・書く・読む力をつける「1」～「8」単元、「まとめ」単元、さまざまな場面で活用するための「資料編」で構成されている。

基本の色分け

1～8単元は各教材を青・緑・赤色、「入門」「まとめ」単元は黄色、コラムは青緑色を基調として色分けをした。

教材の冒頭

各単元のテーマ、身につけたい言葉の力、教材を用いて行う学習活動を示した。

単元のテーマ	身につけたい言葉の力
学習活動	<p>1 左の調査によると、相手との伝え合い（コミュニケーション）…</p> <p>2 相手との伝え合い（コミュニケーション）の中で、自分が重視して…</p>

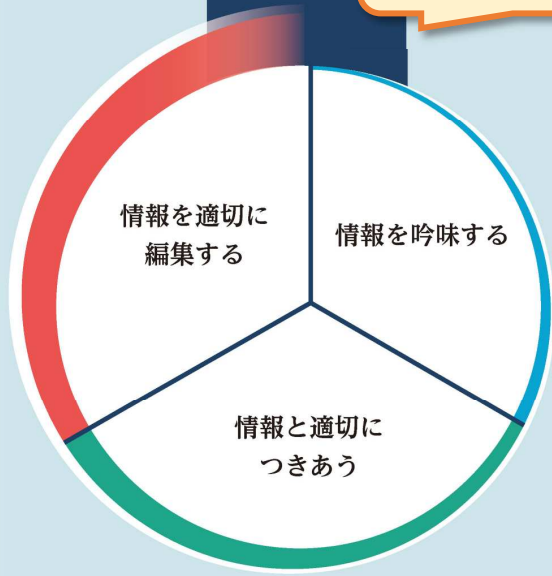
教材の注欄（下段または脇段）

- 語注 ①②…：主に固有名詞や難解な語句に解説をつけた。
- 発問（▼印）教材理解の手がかりとなる箇所に▼印をつけ、問いを示した。
- 語句（＊印）主に慣用的な表現や熟語を取りあげ、見開きページごとまとめて示した。
- 漢字 覚えておきたい漢字を取りあげ、見開きページごとに次の記号をつけて関連する漢字とともに示した。
- 対 対義的な語（例 敏感 対 鈍感）
- 注 似た字形や同じ読みに注意する語（例 感慨 注 概算）
- 読 読み方に注意する語（例 繁 読 繁茂）

2 確かな情報を伝えるために

〈話す・聞く〉

単元扉では、目標に向けて**3つの教材を段階的に学んでいく**流れを明示しています。



情報はつくられる

ひとまず、信じない 押井守

情報を編集し、的確に発表する
—パブリックスピーチ

Tip-4

メディアとのつきあい方
引用について

学びを深める
情報と身体

吉岡洋

学習活動の手引き

情報を整理するために 教材を読むための手引きを示した。

学習活動のヒント

表現活動のための手引きを示した。

「学びを深める」を読むための手引きを示した。

学習活動の補充

表現テーマ例集 単元の表現活動の参考となるテーマを紹介し簡単な解説を示した。

語彙 単元の話題に関連する語句を紹介し簡単な解説を示した。
ブックガイド 単元ごとに「表現」「教材」「単元のテーマ」に関連する本を紹介した。

学びを深める

単元で身につけた力を深めるための文章を掲載した。

常用漢字

漢字は原則として「常用漢字表」の漢字を使用した。それ以外の漢字、および高校配当の音訓には振り仮名をつけた。

二次元コード

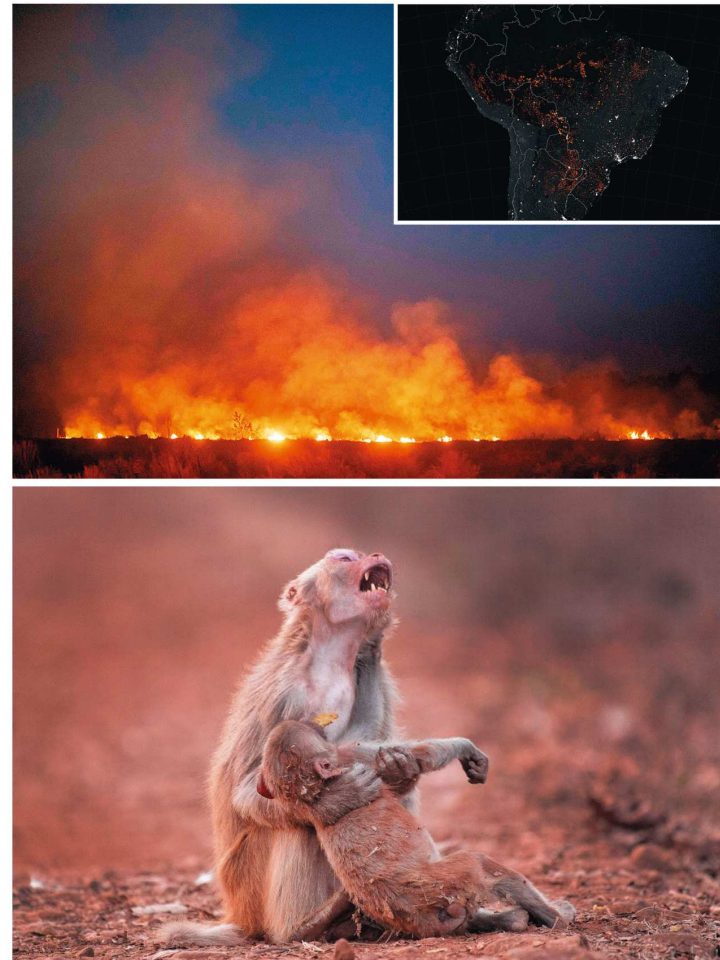
学びを広げたり深めたりする時のために、適宜、二次元コードを付した。

確かな情報を伝える

情報を吟味する

① 何の写真だろう？

見開きで完結する教材で、単元テーマへの導入を図ります。



学習活動

1 「情報はつくられる」とはどういうことか、説明しよう。

情報はつくられる

二〇一九年、南米アマゾンの熱帯雨林で、大規模な火災が起きた。右ページの写真のうち上の二枚は、その様子を撮影した衛星写真と報道写真である。

その際、広がる火災を写したとされる写真がインターネット上のソーシャルメディア(個人の情報発信メディア)で拡散した。しかし、写真の中には数十年前に撮影されたものや、さらにはブラジル以外の国で発生した火災を写したこともあることが明らかになった。

拡散が特に多かった写真の一つに、右ページ下の、息絶えたように見える赤ちゃんを抱くサルの写真がある。だが、この写真は二〇一七年にインドで撮影されたもの

だった。カメラマンは取材に対し、写真の赤ちゃんは倒れかかっていただけだったと説明している。

また、森林の広範囲が火に包まれ大量の煙が立ち上るさまが写った画像で、ある俳優が自身のソーシャルメディアに掲載したところ、百万件以上の「いいね」(肯定的な反応)を集めたものがあった。しかし、この画像は、一九八九年に写真通信社のカメラマンが撮影したもので、二〇〇七年にイギリスの新聞社が掲載したアマゾン森林伐採に関する記事でも使用されていた。

単元テーマに関連したコラムを、各教材間に配置しています。

コラム

メディアのつきあい方

新聞によって私たちは、遠く離れた場所で起きたできごとを翌日には知ることができるようになった。ラジオによってそれは同時性を獲得した。テレビは、その場のリアルな映像を届けることも可能にした。さらに、インターネットの誕生と普及がもたらしているのは、誰もが発信者になれるという、これまでにない環境である。

ソーシャル・ネットワーキング・サービス (social networking service ≡ SNS) は、インターネット上で個人が情報を交換するしくみの一つだ。何気なく「つぶやいた」言葉が思わぬ反応を呼び、反応の連鎖を引き起こし、情報がたちまちに拡散する場合もある。この際、情報はたんに客観的なものとして広がるわけではない。「重要だ」「おもしろい」「感動する」「憤りを感じる」など、さまざまな反応がまわりついていく。

こういったSNSと他のメディアとは、どこが違うのだろうか。次の各メディアと比べ、その特徴を明らかに

してみよう。その上で、SNS、また、その他のメディアとどのようにつきあえばよいか考えてみよう。

- 新聞
- ラジオ
- テレビ
- インターネットのニュース

いま一度、目の前の情報の確からしさを疑ってみて、あなたに求められている情報の目利きをする力（メディア・リテラシー）について考えてみよう。

確かな情報を伝える

情報と適切につきあう

学習活動

1 次の文章を読んで、情報と適切につきあう方法について話し合おう。

ひとまず、信じない

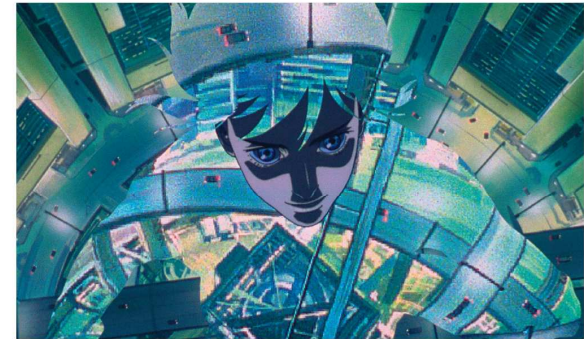
押し守

読後に取り組む活動を冒頭に示すことで、見通しをもって教材を読むことができます。

自分が知覚しているこの現実と、本当に自分が生きている現実が同じものであるという保証はどこにもない。ある解剖学者が話していたが、人間の脳自体が、この世界をバーチャルに理解しているのだ、何が現実なのかということは、人間には実証できないのだ。確かに今、僕の目の前にコップがある。どうしても、そこにコップがあると思えない。しかし、そのことも僕の手先に伝わるコップ

▼ ① 「自分が知覚しているこの現実と、保証はどこにもない」とあるが、なぜか。① バーチャル virtual 仮想の。知覚 覚える・覚める 実証 実相

教材本文は、シンプルで読みやすいレイアウトになっています。



映画「GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊」より

にリアルな夢を見せることができたなら、もはやそれがその人間にとっての現実と
なってしまうのではないか、ということだ。それこそ過去のSF^②作品が何度も描
いてきた世界ではないか。

の感触と、僕の目に映るコップの色形を感じた
だけのことで、その視覚と触覚自体がニセモノ
の情報だったとしても、知覚している僕にはそ
のことに気づけない。

犬や虫たちは、どうも人間とは違うようにこ
の世界を認識している。虫たちの複眼には花の
色は違って見えている。彼らは僕らが見ている
ように、世界を認識していないかもしれない。
同じものを見ても、違うように見ているのだと
したら、緑で覆われた美しい山並みという景色
も、実は現実なのかどうか疑わしくなってい
く。その考えをさらに押し進めれば、人間の脳

本当はすべて夢を見ているだけなのかもしれない。そして仮にそうだったとし
ても、それを確かめることはできないのだ。夢の中の知覚のみが僕らのすべてで
あるならば、夢の外のリアルに触ることができないからである。つまり、ある意
味では僕らの接する情報のすべては、脳が知覚しているだけという点でいうと、
初めからフェイク^③なのだ。

もちろん、僕は今のような話をもってして、インターネットがよくないほうへ
進んでいるかもしれないという危機感を茶化^{*}すつもりはない。だが、「情報なん
てフェイク」^④くらいのニヒリズム^④でも持っていなければ、フェイクニュースに足
をすくわれるということは言いたい。それが今のネットの根本的な問題ではな
かったか。

実は、リアルタイム^⑤で真実を追求するというインターネットの構造そのものが、
フェイクニュースを生み出す仕組みになっている。今のように世界が衛星回線と
インターネットでつながり、地球の裏側で起きたことを瞬時に知ることができる
ということは、一見、便利なことのような気もする。しかし、そこには大きな落
とし穴がある。

15

10

5

5

10

15

② SF science fiction 通
常の時間と空間の枠組み
を超えた出来事を科学的
仮想に基づいて描いた物
語。空想科学小説。

③ フェイク fake にせもの。

④ ニヒリズム nihilism 虚
無主義。否認の思想。

▼ ④ 今のネットの根本的な
問題とは何か。

⑤ リアルタイム real time
即時。同時。

▼ ⑤ 「大きな落とし穴」とは
何か。

* 語句

茶化す／足をすくわれる

覆われた 語 覆す

追求 語 追及・追究

戦争の映像をリアルタイムで見ることと、戦場で何が起きているかを知るということは、まるで違うことだからだ。特に映像として切り取られたものは、戦争という現実のごく一部にしかすぎない。これは映像だけの話ではない。仮に現地にいる人間がSNSで何かを発信していたとして、それは、その人物が知りえた情報でしかない。

情報発信している人間が、將軍なのか、一兵士なのか、民間人や難民なのか。それによっても情報の信頼度や中身は大きく変わってくる。あるいは、そのSNS情報そのものが、何かの意図をもって流されたニセ情報である可能性も捨てきれない。外界と人間の脳の間で起きえる情報の改竄かいざんと同じようなことが、SNSの情報を受け取る我々と戦場の間で起きている、ということだ。5 荒唐無稽に思えるそんな話が、実は脳の外で起きているかもしれない。考えてみれば、これは怖いことである。

ネットの登場によって、すべての人類が情報を共有することができるようになり、立場を超え、国境を越え、同じ土俵で問題に向き合うことができるようになった。そういう輝かしい時代をインターネットが切り拓ひらいた、などと考えてい

5

15

⑤ デマゴギー demagogu
根拠・確証のないうわさ話
デマ。

る人間がいるとしたら、それはかなり控えめに言っても、無自覚にデマゴギーをまき散らす存在である。そんなことが本当に可能な世界が来ると考えていること自体が、大いなるフェイクなのである。

インターネットの出現は、個人が手にできる情報の精度を、それまでよりも格段に落としてしまった。一見、便利で使い勝手がよいネットは、情報から人々を遠ざけてしまった。そのことに早く気づくべきである。6

5

▼ ⑥ ネットは、情報から人々を遠ざけてしまった」とはどういうことか。

* 語句
改竄 / 荒唐無稽 / 格段
土俵 米俵
精度 認 精進



押井守 おしいまも

一九五一(昭和二六)年。東京都の生まれ。映画監督、アニメーション演出家・小説家・脚本家・漫画原作者・劇作家・ゲームクリエイター。主な監督作品として「うる星やつら オンリー・ユー」「機動警察パトレイバー the Movie」「GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊」などがある。本文は「ひとまず、信じない」(二〇一七年)による。

🔍 情報を整理するために

・「ひとまず、信じない」とあるが、なぜ「ひとまず」なのか説明してみよう。

各文章教材には、内容理解の手引きとなる「情報を整理するために」を設定しています。

コラムでは、文章を読んだり書いたりする際の**基本的なスキル**にも触れていきます。

コラム

引用について

他人の文章や事例などを自分の文章の中に引いて説明に用いることを「引用」という。引用は、自説の確かさを訴えるために欠かせない。ただし、引用する際に注意しなければならないことがいくつかある。

① 公開された著作物からの引用であること

引用する場合、引用先の信用度が問われる。かつ、自分以外の人でも調べたり、確かめたりするのが可能なものでなければ引用することはできない。引用する際、引用元の出典を明記しておくよう求められるのはこのためである。

② 引用であることがわかるように書くこと

どこまでが他人の文章からの引用なのか、見た人がわかるようにしなければならない。短い引用を行う場合は「」で地の文に埋め込む方法がある。また、引用文が数行にわたるなどの場合は、引用文の前後を一行空け、

行頭から二文字分下げて書くことで、引用であることを明示する方法がある。

③ 自分の文章が「主」で、引用は「従」であること

引用はあくまで自説の補強のためにするのであって、必要以上に引用が多いとそれは他人の考えの「紹介」になってしまう。また、引用ばかりの文章は、ややもすると「剽窃」や「盗作」と言われかねない。

④ 引用する必然性があること

引用するためには理由がある。書き手には、なぜその語句や文を引用しなければならないのか、前後の文脈でしっかりと伝える義務がある。

⑤ 原文通りに引用すること

引用する相手の、そもその意図を損なわないためにも、勝手に書き換えることなく、正確に引用する必要がある。ただし、相手の見解を自分の言葉でまとめて書く「要約引用」という方法もある。

⑥ ウェブからの引用で気をつけること

ウェブページから引用する際は、記事の題名とURLのほか、閲覧日時も明記するとよい。閲覧日時を入れるのは、インターネット上ではページの内容が更新されたり、ページそのものが削除されたりすることがあるためである。

あらゆる著作物には、原作者の著作権がある。その権利は守られなければならない。だから、高校生であっても、自分の署名のもとに書いたものを公にする一人の書き手として、引用元の著作者に対する敬意を忘れずに、文章を組み立てられる人でありたい。



確かな情報を伝える

情報を適切に編集する

学習活動

- 1 情報を適切に扱うにはどうすればよいか、「情報はつくられる」「ひとまず、信じない」なども参考にしながら考えよう。
- 2 自分で調べた資料を加えて考えをまとめよう。
- 3 まとめた自分の考えを三分間で発表しよう。



❶ パブリックスピーチをしよう 聞き手を意識したスピーチ

スピーチをする機会は、誰にでも訪れる。せっかく人前で話す機会を得たからには、自分の伝えたいことが伝えたいままに伝わり、なおかつ、相手に影響力のあるスピーチをしたい。

では、大勢の人の前でスピーチをする時、どんなことに注意したらよいだろうか。聞き手の立場に立ったわかりやすい話し方の基本をおさえた上で、三分間のパブリックスピーチに挑戦しよう。

❶ 原稿づくりのポイント

話す内容の構成は、次のような型を意識してみよう。

はじめ（序論） テーマを伝える／聞き手の共感を得る

なか（本論―引用と考察） 言いたいこと（結論）の根

拠・理由・事例を三つほど用意する

おわり（結論） 自分の考えを述べ、全体を締めくくる

こうすることで、聞き手は、話し手がどんな内容をどんな観点から話そうとしているかが把握でき、核心に焦点を合わせやすくなる。なお、一文が長すぎると聞き手が話の流れをつかみにくくなる。短い文を積み重ねていく話し方は、呼吸の間も取れて、話にリズムが生まれる。

❷ 話し手のポイント

原稿がまとまったら、話す前にスピーチ内容を確認し、イメージトレーニングをしてみよう。原稿の棒読みにな

「話す・聞く」「書く」単元の3教材めには、2教材めまでの学習を踏まえた**言語活動・表現活動**が設定されています。

らないように、声の大きさ・速さ・高さ・間などを意識的に変化させてみる。また、相手に伝わるスピーチにするには、聞き手が大勢であっても、一人一人に向き合っているかのように話す。

例えば、一つの文の句点（。）までを一人に目を合わせて話し、そのあと別の一人に視線を移す。こうして、文章を区切りながら視線を動かすことで、聞き手の注意を引きつけ、信頼を得ることにつながる。

❸ 聞き手のポイント

聞き手は、話し手のほうに体を向け、うなずきながら聞く。相手が話しやすくなるようにしてあげよう。また、スピーチ後の質問では「なぜそのように考えたのですか」「もう少し詳しく話してください」など、相手のスピーチ内容をふまえた議論の展開を目指そう。活発な対話によって、話し手・聞き手、双方の思考を活性化させることができる。

単元ごとに、書く・話す活動のための具体例な論点や視点を提示する「表現テーマ例集」を配置しています。

表現テーマ例集

メディア・リテラシー

情報の確かさを保証する上で、唯一の正解はない。ゆえに、情報を受け取る側の目の確かさが問われる。メディア・リテラシーを高めるとは、自分の鑑識眼を精緻にするということである。次のようなテーマについて、書いたり、発表したり、話し合ったりしてみよう。

❓ フェイクニュースにだまされないためには？

本単元でも扱ってきたように、世界中にフェイクニュースがあふれている。しかし、どれがフェイク（嘘）でどれがファクト（事実）なのかわからないのが実状である。では、どうすればフェイクニュースにだまされないで済むのか、自分にできることを考えよう。

❓ メディアの役割とその変化って？

新聞・ラジオ・テレビ・インターネットと、この百年ほどを振り返っても、さまざまなメディアが覇権を争ってきた。そもそもメディアとは、何かと何かを媒介する仲立ちのことである。メディアの歴史を振り返りながら、それぞれの役割の変化をまとめてみよう。

❓ スマートフォンをどう活用する？

かつてスーパーコンピューターを使わなければできなかったようなことが、いまや私たちの手のひらに収まった端末で実行できる。では、私たちの体の一部とも言えるものになったその道具を、いったいどのように使うべきなのだろうか、考えてみよう。

🧠 考えるためのプロセス

- 問いについて、まず今の自分の視点から考えてみる。
- 次に違う視点から考えてみる。調べたり、話を聞いたりする必要がある。
- その上で、もう一度考え直してみる。

具体例・モデル例などを交え、丁寧に学習活動を解説します。

【発表原稿例】

はじめ

言葉の定義をまとめ、これから述べることの概要を整理する。

● 原さみです。発表を始めます。

フェイクニュースとは、本物を偽った虚偽のニュースのことを言います。1994年、ルワンダの大虐殺を引き起こしたのは、フツ人主体の政府軍や民兵がラジオ放送に扇動されたからだといわれています。フェイクニュースが社会を混乱に巻きこむ恐れは、インターネットが発達した今の社会も無縁ではありません。

事例①

事例を取りあげ、何が起きているのかを紹介する。

● 2019年、ソーシャルメディアのユーザーらは、共通のハッシュタグを用い、世界最大の熱帯雨林であるアマゾンで森林火災が急増していることに怒りを表明しました。しかし、その時に使用された写真の大半は数十年前に撮影されたものや、さらにはブラジル以外の国で発生した火災を写したものであることが明らかになっています。

事例②

事例を取りあげ、背景にある問題点を指摘する。

● また、SNS上における十年分のツイートを分析した結果、嘘が真実よりも速く広まるだけでなく、私たち人間が嘘を広めている、という研究成果が発表されています。どのカテゴリーにおいても、嘘は真実よりも速く、早く、深く、広範囲に広がっていったのです。

引用

問題点に対する識者の意見を紹介します。

● このような問題に対して、映画監督の押井守は「リアルタイムで真実を追求するというインターネットの構造そのものが、フェイクニュースを生み出す仕組みになっている」と警鐘を鳴らしています。なぜなら「自分が知覚しているこの現実と、本当に自分が生きている現実が同じものであるという保証」はどこにもなく、「何が現実なのかということは、人間には実証できない」からです。

考察

引用などをふまえ、導かれる考えをまとめる。

● よくいわれるように、ある情報の事実性に疑いをもち、それを確かめるファクトチェック（事実確認）は確かに役に立ちます。しかし、多くの人が指摘するように、ファクトチェックをネットで見かける全ての情報に対して行うことは、時間的に不可能です。加えて、チェックするのは基本的には疑わしいと思った情報であり、疑いをもたない場合や事実だと思った場合、チェックを行うことはまずありません。

おわり

ここまでの記述をふまえて、自分の考えを述べる。

● フェイクニュースの拡散を防ぐために、私たちは、自分自身が特定の「フィルターバブル」の中にいる可能性を意識し、自分にとってもっともらしい情報にこそ気をつけるべきなのです。
以上で発表を終わります。



学習活動のヒント

単元ごとに振り返り項目を明示。観点別評価にもつながります。

振り返る

- ① 情報との適切なつきあい方について、「ひとまず、信じない」の筆者の考えをまとめよう。
- ② 情報との適切なつきあい方ができているかどうか、自分の考えをまとめたり、発表したりしよう。



学びを深める

「情報と身体」を読んで、「本当の情報リテラシー」（57・上4）とは何か、考えてみよう。



語彙

メディア・リテラシー

「フェイクニュース」 マスメディアやソーシャルメディアなどで、事実と異なる情報を報道する、あるいはそのような報道を行うメディアそのものを指す。虚偽であるにもかかわらず、た上で行う架空報道や、推測を事実のように報道するなど、故意のものについては捏造報道とも言う。

「サイバーカスケード」 インターネット上で、同様の意見・感想をもつ人々だけが集まり、極端に偏った方向に意見が集約され、自分たちと反対側の立場を無視・排除するようになる現象のこと。

「エコーチェンバー」 閉鎖的な空間内でのコミュニケーションを繰り返すことによって、特定の信念が増幅または強化される状況の比喩を指す。もとは、密閉された音楽録音用の残響室のこと。

「フィルターバブル」 インターネットの検索サイトなどの各ユーザーが見たくないような情報を遮断する機能（フィルター）により、「泡」の中に包まれたように、自分が見たい情報しか見えなくなること。



学びを深める

情報と身体

よしおか 吉岡洋

世界が、とても狭くなってしまった。

ここには二つの意味が含まれている。第一に、メディアの発達によって、世界のさまざまな場所で起こっているできごとを、簡単に知ることができるようになった。新聞、写真、電話、映画、テレビ、そしてインターネットのおかげで、空間的距離や時間的遅れはどんどん縮小されてゆき、その結果世界は確かに「狭く」なった。メディアの中では、自爆テロもオリンピックも国会での証人喚問も、あたかも目の前で繰り広げられている一連のショーのようだ。それらは悲しみや怒りや喜びといった強い感情を引き起こすけれど、自分自身は日常生活という「観客席」に座ったままなのである。

これは未曾有の状況である。人間は長い間、自分が住む小さな共同体リムラの外で何が起きているかを確かめるには、旅に出るほかはなかった。「旅」とは身体がリアルな時空間の中を運動することであり、その運動を通して世界を経験することである。これは、生き物として自然なことでもあった。一方メディア環境においては、身体の運動なしに世界についての知識が獲得される。そこでは、より多くの情報を得るためには、より長くモニターの前に座っていること、つまりできるだけ身体を動かさないことが必要になる。ここでは知覚と運動とが分離されている。その意味で、生き物として大変無理なことを強いられているわけだ。

さて、そのようにして膨大な情報にさらされている私たちは、これまでよりも世界をオープンに経験しているだろうか？ とてもそうは思えない。インターネットによって誰もが直接「世界」にアクセスできるはずなのに、ほとんどの人が仕事以外にやっているのは、仲間うちでメールを交換し、国内のごく限られたウェブサイトを眺め、掲示板でおしゃべりすることである。情報ネットワークは、それがただ存在するというだけでは、未知の人々どうしの出会いなど生み出さ

注や課題は後ろにまとめ、文章の読みに集中できるレイアウトになっています。

ない。むしろ現在のインターネット環境においては、人々は情報を既製品のカタログのようなものとして経験するし、人間どうしの出会いすら、もはや思いがけないできごとではなくなり、一定の手続きに変えられてしまう。

これが、世界が「狭く」なったということの、二番めの意味である。情報ネットワークの中で、人々はますます狭い世界の中に安住するようになってしまったのだ。八〇年代末、オタクということがよく話題にのぼった。現在、多くの人がマニアという意味でのオタクになったということではないけれども、オタク的な心性は社会にすっかり根をおろしたようにみえる。すなわち人々は、外の世界「について」の言葉やシンボルを操作するのは巧みだが、自分の世界「の中で」それらを意味づけようとはしない。まるで「幽体離脱」のように、知識と身体とを切り離す術を習得してしまったのである。かつては、僅かな情報を手に入れるために、図書館に通ってかたづけしから資料を調べたり、注文した外国雑誌を何か月も待たなければならなかった。それは確かに、とても不便なことであった。けれどその「不便さ」がある意味では、情報の意味をゆっくり考える猶予を与えてくれていたと

スイッチを切る「習慣かもしれない。メディアという「観客席」からサッと立ち上がったてはまた戻ってくる。電子的空間と身体的現実との間の往復運動に、自分なりの軽快なリズムを見いだすこと。そこそが本場の情報リテラシーだ。IT革命も行き詰まった今こそ、情報通信技術が人間にとってなんの役に立つのかを、産業界や専門家に任せせず、日常生活の「中から」考えていく絶好の機会なのである。

- ① モニター monitor コンピューターの表示装置。ディスプレイともいう。
- ② ウェブサイト website インターネット上で、一冊の本のようにひとまとまりの情報がおかれている場所。
- ③ マニア 特定の分野・物事に対してのめり込んだり、関連品または関連情報の収集を積極的に行ったりする人。
- ④ 幽体離脱 魂が肉体から抜け出るとされる現象。
- ⑤ リテラシー literacy ある分野に関する知識やそれを活用する能力。
- ⑥ IT革命 revolution of information technology 情報通信技術（IT）の革新によって、経済をはじめとする地球規模での社会システムが大きく変化していく動向のこと。産業革命に倣って呼ばれる。

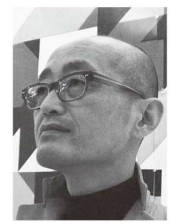
もいえる。また、ある種の情報が手に入りにくいことは、それを獲得し自分のものにしようとすると強い動機づけになっていた。逆説的に聞こえるかもしれないが、そうした「効率の悪さ」が、とても複雑な意味の場を形づくっていたのである。長い時間のかかる作業は人にいろいろなことを考えさせ

たし、その途中で思いがけないものが見つかったりした。それに対し、探しているものがすぐ見つかる情報空間とは、裏をかえせば「単に探しているものしか見つからない」退屈な場所だともいえる。
こんなふうに行ったからといって、昔を懐かしんでいるわけでは決してない。そうではなく、人間が常に身体を伴った存在であること、情報に意味を与えるのはこの身体を通してしかありえないことを、いま一度思い出そうといっているだけだ。インターネットにどっぷり浸りきるのも、逆にそれを拒絶するのも得策とは思えない。大切なのはむしろ「頻繁に



読みナビ

- 「ここには二つの意味が含まれている。」(55・上2)とあるが、「二つの意味」をそれぞれまとめてみよう。
- 「逆説的に聞こえるかもしれないが」(56・下4)とあるが、「ここ」での「逆説」とはどのようなことか、説明してみよう。
- 「情報に意味を与えるのはこの身体を通してしかありえない」(56・下16)とはどのようなことか。「情報」「身体」「旅」を関連づけて考えてみよう。



吉岡洋 よしおかひろし
一九五六（昭和三二）年。美学者。著書に『思想』の現在形』『情報と生命』などがある。本文は「朝日新聞」(二〇〇二年三月一五日夕刊)によった。

読後の手引きとして「読みナビ」を設けています。

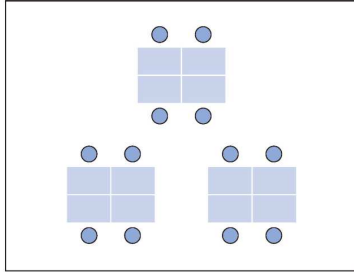
資料編では、言語活動に役立つ参照情報を、簡潔にまとめています。

【グループディスカッション】

あるテーマについて、異なる立場や考え方の人たちが少人数で意見交換をし、結論を一つにまとめたり、考えを広げたりする話し合い。グループごとに司会や記録などの役割を分担することで、効果的な話し合いになる。

手順

- 1 テーマを決める。
- 2 少人数のグループに分かれる。
- 3 グループごとにディスカッションを始め、それぞれの立場から意見を述べる。
- 4 テーマについて、グループとしてのまとめをする。



他の方法 ▶ ペアトーク

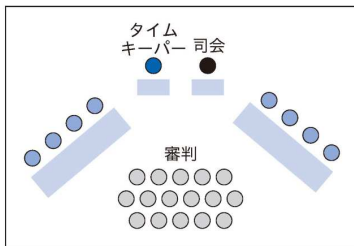
短時間で行うことができる二人組での話し合い。同じ意見を確認し合ったり、異なる立場からの考えに気づいたりすることができる。

【ディベート】

二項対立的なテーマに対して、二つの異なる立場を設定し、時間制限などのルールにしたがって行う討論。

手順

- 1 肯定側・否定側の二つのチームと、司会・審判などに分かれる。
- 2 チームの立論の根拠となる情報を整理する。
- 3 両チームの代表者が立論を述べる。
- 4 相手チームに対する質問や反論を述べる。
- 5 両チームが意見を述べる（最終弁論）。
- 6 審判が判定をする。



〈二項対立のテーマ例〉

- ◆ 日本はサマータイム制を導入すべきである。
- ◆ 救急車の利用を有料化すべきである。
- ◆ 高等学校まで義務教育にすべきである。

話し合いの方法

話し合いにはさまざまな形式があります。アイデアを出し合う場合、全員で何かを決定する場合など、目的や参加する人数に応じて使い分けましょう。

各単元の関連図書を、「表現」「教材」「テーマ」に分けて紹介します。

ブックガイド



● **表現**にかかわる本

『わかりやすく伝える技術』
池上彰
ジャーナリストの筆者が、豊富な経験をもとに、さまざまなエピソードをまじえながら「わかりやすい技術」を紹介する。

『ことばだけでは伝わらない』
西江雅之
「見た目」や「伝え方」だけではない「伝え合い」という考え方で総合的に捉えた、コミュニケーション入門。

『他者と働く』
宇田川元一
人と人との「わかりあえなさ」を解決するために、相手との溝に橋を架け、新しい関係性を構築することの重要性を説く。

● **教材**にかかわる本

『ひとまず、信じない』
押井守
ネットやサイバー攻撃などを扱う映画を世に送り出した著者が、手にした情報に対して自らの頭で考えることの大切さを説く。

『うわさとは何か』
松田美佐
ネット社会となった現代も人々を魅了し惑わせる「最古のメディア」であるうわさを通して、情報とのつきあい方を考える。

『未来の地図帳』
河合雅司
二〇四五年の日本人はどこに暮らすのか。「日本の地域別将来推計人口」のデータをもとに予測した、未来のための手引き書。

● **単元のテーマ**にかかわる本

『日本社会のしくみ』
小熊英二
改革が何度も叫ばれながらもなかなか変わらない「日本社会のしくみ」を、雇用慣行に着目することで解明していく。

『社会学史』
大澤真幸
アリストテレスからカントン・メイヤスマで、知の巨人が産み出した思想を網羅的にたどり、社会学の歴史を一望する。

『ミライの授業』
瀧本哲史
全国の中学校を訪れて開講した特別講義「未来をつくる5つの法則」のエッセンスを凝縮。「なぜ学ぶのか」の疑問に答える一冊。

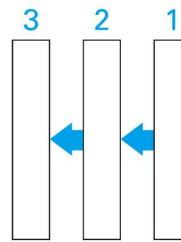
比較、分類、仮定など、基本的な思考の方法を簡潔にまとめています。

「思考の方法」一覧

「思考の方法」は、実際に物事を考える場面では、いくつも組み合わせられて用いられます。話す・聞く・書く・読む活動の中で、まずは意識することが重要です。意識しながら繰り返し活用して、場面や状況に応じて自由に使いこなせるようにしましょう。

思考の方法 順序立てる

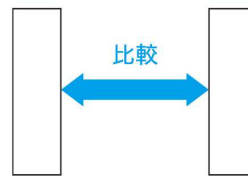
まず……。次に……。最後に……。
第一に……。第二に……。第三に……。
○○の順に並べてみると……。



順序を整理したり、並べ替えたりすることによって、内容のまとまりや全体の流れが捉えやすくなり、考えを整理できる。

思考の方法 比較する

○○と□□を比べると……。



二つ以上のものを互いに比べ合わせることで、同じところや似ているところ、違うところをはっきりさせることができる。
どのような点で比べるかという比較の観点を明らかにしておくことで、考えがより詳しく確かなものになる。

報道や宣伝・広告の文章など、実用的な文章の特徴・読み方を解説しています。

実用的な文章の特徴

日常生活で目にする文章の中には、具体的な何かの目的やねらいを達するために書かれたものもあります。ここで取りあげたような文章は、決まった形式や構成にのっとることで、読み手が速やかに内容を理解できるようになっています。

1 報告書

報告書とは、関係者に必要な情報を提供するための文書のことである。タイトル↓概要↓詳細という三階層の論理構造で、情報を整理して伝える。具体的には、日時(出張期間)、場所(出張先)、内容(活動内容)等について、情報を簡潔に記述する。

- ① 発信年月日：報告書には、必ず発信した年月日を書く。この年月日によって報告書に書かれた情報の新鮮さがわかる。
- ② 提出先：報告書の提出先、宛名を左寄せで書く。
- ③ 報告者所属・氏名：報告書の発信者の所属と氏名を、右寄せで書く。
- ④ タイトル：報告書の概要が端的にわかるような簡潔なタイトルをつける。
- ⑤ 本文：「標題の件……」以下は、報告書の定型句である。
- ⑥ 結び：最後に「以上」をつけ、終わりであることを示す。

〈報告書の例〉

① 20XX年5月10日

② 佐藤弘子営業第1課長

③ 営業第1課 木村登

④ ベトナム出張の報告

⑤ 標題の件につき、下記のとおり報告いたします。

記

出張期間 20XX年4月5日～15日

出張先 ベトナム社会主義共和国 ハノイ市・ホーチミン市

活動内容 新しい現地生産拠点の候補地として5カ所の工業団地を視察した。

報告事項 立地条件や利用条件などを勘案した結果、ロンドンウック工業団地が最も優れていると判断した。詳細は別添の「各工業団地に関するレポート」を参照のこと。

添付資料 ベトナムの5カ所の工業団地の比較資料

⑥ 以上